時　元の世祖フビライ帝の至元十八年（一二八一）一月七日。

所　大元帝国の首都燕京（現在の北京）。酷寒の華北の冬空の下、大帝のもとに西域、華南、南海各地からやってきたさまざまな服装の賀正使の一行や、日本征討の旅に出発する軍団がごったがえしている。その大都の一隅にある高麗使宿舎の高麗宰相・征日本都元帥金方慶将軍（七十歳）の私室。

金方慶。まっくろに陽焼けして、痩身長軀表情すくなく訥弁で、いかにも若年より高麗のために歴戦して来た武人らしい秋霜烈日といった感じと、前高麗王世宗の宰相李蔵用なきあと、現王忠烈王を助けて、世界帝国元の強大な圧力下に、疲弊の極に達した小国高麗の安危を一身に荷う人物の威厳、叡智がともにそなわっている。――剃髪弁髪胡服というモンゴル風の服装。

金方慶　（従者に）日本のものだと？――なぜいまどき、この都へ……。

従者　わかりませぬ。蛮子軍（南宋軍）の雑兵にまぎれこんでおりましたようでございます。南宋によく渡来しておりました倭の私易船の水夫ではないかと思います。

金方慶　それで？――なんだと申しておるのだ？

従者　おそれ多くも、倭人の身で大帝に謁したいなどと……気狂いにちがいありませぬ。

金方慶　狂人とも見えぬ。かといって、刺客、密偵とも思えぬ。挙措容姿に、品も凄味もない。――日本の方、この非常緊急の時に、元都に何しにこられた？　至上に謁したいだと？　何という気狂い沙汰だ。今日ただいまの、元、高麗と日本の関係を知らぬのか？　一昨年六月より、元、高麗、蛮子国において第二次日本征討の準備着々なり、本日朝、皇帝より、蒙、麗、漢（北支人）軍四万、蛮子軍一〇万に出征の命が発せられたのだぞ。

小松　ええ、ちょっと時期が悪かったとは思いますが……何しろあっちこっちとびまわっているうちに、タイムマシンがだいぶいたんで来て、ピンポイント着時空がうまくできなくなっちまいまして……やっぱり日本製というのは、あまり長持ちはしませんな……。

金方慶　（従者に）何を言うておるのかよくわからぬ。やはり狂人かも知れぬな。――それで大帝に拝謁して、どうしようというのだ？

小松　どうという事もありません。フビライ帝はヨーロッパからアジアにまたがる大帝国をきずき上げたモンゴル太祖チンギス・ハーンの直系の孫として、東方世界至上の皇帝として、寛仁大度の方とききました。イスラム、キリスト、拝火、仏のそれぞれの教徒も、この世界の都にあってはひとしく大帝の天父の如き慈愛の掌に争う事なくそれぞれの道を説き、はるか西方ヨーロッパ世界よりたずねて来た、ヴェネツィア人マルコ・ポーロも、現にいま、大帝の寵を受け、見聞をひろめております。私も、はるか七百年後の日本のものとして、元という世界帝国、元都、元帝が、この時代においていかなるものであったか、この眼で見たいと思ったまでで……。なおその上で、大帝の対日本政略の根本構想についてでもうかがえればと……。

金方慶　（じっと瞑目して）それだけか？

小松　ええ……何しろ案内人がどこかへ行っちまったんで、勝手がわからないでうろう

ろしているうちに、つい庭先にまぎれこみまして……。

金方慶　（突然吐き出すようにはげしく）おそかったわ！——日本の方、今となっては、何も彼もおそい！

小松　（どぎまぎして）おそかったって……何がです。

金方慶　日本の方——あなたは元帝国の事情について、いささか知っておられるようだが、いまの日本の中に、大陸北方西域の事情について、あなたほどの関心を持っておられる人士がいかほどいるか？

小松　さあ、どうですかねえ。——一昨年、日本年号でいう弘安二年に宋王朝がほろんだ事は、この年鎌倉幕府が南宋の禅僧無学祖元師をよんで、特に執権時宗が敬事していますから当然そこらへんの事情は知っておりましょうが……。

金方慶　宋——南宋か……。宋代三百年の漢人王朝も、今は完全にほろびて、元帝国の中で、南宋人は何とよばれているか知っているか？　〝南人、蛮子〟とよばれて、北宋、金領にいた華北華中の〝漢人〟よりも、さらに一段下にいやしめられ、元朝においては最下位の民におとしめられているのだぞ。宋がほろんだ、と知ったなら、なぜ日本の政府要人は、その長年交流のあった、尊敬する宋をほろぼしたおそるべき勢力に対して、もう少し関心を持ち、それを探ろうとしないのだ？せめて非公式に交流使を派遣してみようとしないのだ？——そんな大切な事をなおざりにして、日本の政を執るものたちは、よく政治の責任が果せるものだな。

小松　さあ、その事ですが……。一つは、日本列島が、玄海、朝鮮、対馬海峡の風濤万里の彼方にあって、その海は潮流早く、波浪荒く、台風の進路にあたっているため、海外からの大規模な侵寇などは為政者の考えても見ない所であるからでしょう。今より六百年の昔、御国の前に半島を統一した新羅に対し、日本の朝廷は、新羅にほろぼされた百済の請を入れ、またかつての半島南部利権を恢復せんと、阿倍比羅夫の水軍をおもむかせ、白村江で、唐・新羅連合軍にさんざん破られた事もありました。その時、大和朝廷は唐・新羅軍が勢をかって侵寇してくるものと恐怖し、北九州に水城山城をきずき、瀬戸内経由で唐・新羅水軍が畿内を直撃するのを恐れて、帝都を永年の所在地大和から、わざわざ辺境近江にうつしたほどです。——しかし、唐・新羅の追撃侵寇はありませんでした。——もう一つ、日本の大陸外交が、一つは海流の関係からでしょうが、中国中原から華南へかたむく傾向がある事です。日本が、大陸北方とやや交流を持ったのは、靺鞨の地に渤海国があったころだけで、唐ほろんだあとの五代のころは、揚子江下流の呉越の地との交易が維持され、さらにその後、公卿武家ともに宋になじんで、北宋が遼、金にほろぼされて漢朝が南遷したあとも、南宋との交流はずっとつづけられ、両程、朱熹（朱子）の宋学、禅ともに、宋の思想的影響が、公武いずれにもきわめて強かった……。

金方慶　それはわかる。漢化はこの地にすでに二千年にも及び、われら高麗国とて、三百年前の四代光宗のころより北宋に服属してきたのだ。——したが、華北遼東の地は、化外の諸族のこもごも侵し、諸朝興亡常ならぬ域であり、わが高麗もその中にふくまれる。夷蛮戎狄の王も、天命によって帝とならば、これに貢を通じて臣礼をとらねば、国土人民が危い。——これがこの地の「大義」だ。空理空論の名分をもてあそべるほどの贅沢は、われらの国には許されない。高麗にもかつて士太夫中にみずから漢人と同化せるつもりの

犬儒あり、契丹、金、蒙古に対してこれを夷狄として下風に見、観念的な名分論をふりまわして、漢文化に殉ずるにひとしき愚を献策するものもいたが、われらに言わせれば、なぜ高麗の民が、漢流の大義に殉じなければならぬかわからぬ。この愚はおさえたが、蒙昧粗暴の武人をおさえきれず、結局彼らの己れを知らず敵を知らぬ愚によって、高麗の地はかつて千里人煙絶え、鶏犬を見ぬほどに、くりかえし蒙古軍に蹂躙された。先王世宗はついに元に服したが、この時屈辱を拒んで高麗の王朝ほろび、高麗という「国」が地上より喪失すれば、半島の地の民は、根こそぎ辺土胡地にうつされるやも知れず、あるいは西域において諸可汗のなしたが如く、一邑一村のこらず破壊され、全人民殺戮絶滅させられぬともかぎらない。——日本の朝野の人士、「国を保つ」の責にあたって、よくこの事を知るや否や。今日ただいまより、日本の上におそいかかろうとしているのは、まさにかかる運命であり、選択である事を、貴国の王侯貴族、武官政権は知っているのか？　宋朝漢人への義は義としておいていい。しかし東海中の島嶼によるとは言え、一国を保つための経略はまた別事、親交を一方にのみ限り、言を一方よりのみ聞き、他方を見る事さえなく頭からしりぞけ、大勢を比較勘案して方途をさぐる事なくんば、すなわち国を保つ事あやうからん。——日本は亡国南宋に殉じて、国土人民王朝の歴史を損うのか？

小松　まあ別にそんな気はないでしょうが——何しろ日本は、永年海壁に閉されて「自然鎖国」の傾向がつよく、ほとんど一小国としての「外交」の虚実をふるう必要なしに、のほほんと暮して来ましたから、どうしたって政治も夜郎自大になりますし、外との交流は一方的にこちらから出て行って勝手なふるまいをするか、一方的に閉じるか、さもなくば危機にのぞんでも、己れを知らぬとんだはね上りの、外の世界に通用しない滑稽きわまる観念論が国内世論の大勢を占め、ちっとは外の情勢のわかった政府外交の足をひっぱる、という事になります。

金方慶　（うなずく）それは夜郎国の例をひくまでもなく、辺土小国がおちいりやすい通弊だ。高麗でも、北辺を女真におかされる事すくなく、文官の力が強まった時、そういう傾向が起ったときく。——したが、なによりも歴史の手痛い体験は、そんな甘さを吹きとばしてしまうし、夜郎自大では国として生きて行かれぬ事を、朝野に知らせるものだ。国土を鉄騎に侵略され、都邑をあとかたなく焼かれ、山林田野濠堤を破壊され、人民子女壮丁を殺され、国土をくりかえして劫掠されれば、おのずと内政外交の何たるかを悟らざるを得ない。

小松　そう——その経験が日本にはないんです。日本の経験した「戦争」というのは、今から六百年のちにいたるまで、ほとんど「内ゲバ」でした。それも一族覆滅というようなすごいものはごくすくなく、最近では源頼朝の奥州藤原攻め——これはモンゴル式の、〝焼きつくし、奪いつくし、殺しつくす〟三光作戦にちょっとちかいものでしたが、このほかではのちに信長がちょいとこれに似たやり方をやりかけて、たちまち暗殺されてしまいます。あとはまあ応仁の乱の、関ヶ原のといっても知れたもので、〝同国人〟だと思うから、大陸のように異民族同士のような苛酷さを国民的に経験した事がないんです。——外から異民族の大規模侵寇をうけた事はない。そりゃ、日本の初期王朝は、東胡からの征服王朝だという説もありますし、南朝鮮とは何回も侵寇したりされたりした事もある。新羅もやって来ていますし高麗も、たしか二百八

十年ほど前に、北九州に侵寇している……。

金方慶　（さえぎって）高麗は建国以来、度々国信書を送って善隣の交を結ぼうとしたのに、日本が無礼にも拒絶をくりかえしたからだ、ときいておる。

小松　さあ、それがあのころは悪い時代で中原では唐がほろびて五代の世になる、朝鮮では新羅が高麗に、沿海では、これも永年交流のあった渤海が契丹にほろぼされ、大陸ではまた情勢混沌とした時代でしょう。その少し前に、菅原道真って平安貴族が――彼は大学者だったんですが――藤原氏との暗闘中、遣唐使にやられようとして、「益なし」てんで遣唐使を廃止しちまっている（八九四年）。つまり日本は、国家としての、正式の大陸交流をやめてしまった鎖国時代だったんです。――ま、いずれにしても、日本は、大陸からごく小規模の侵寇をうけても、中央を強大な武力に侵略征服され、長期にわたって、まったく異質の民族の劫掠、支配をうけた事がない。――やっぱり、二百キロの風濤荒い海峡が大きな意味を持っているんですね。だから、日本にとっての外交とは、一国の存危にかかわる重大事ではなく、つきあうつきあわないは、こっちが勝手にきめられる、いわば「国政の余技」にすぎなかった。これは、上下の別なく、一種の「国民的体質」となって、ずうっとのちのちまでつづいています。私たちの時代になって、一度大戦争をやって、白村江以来の大敗を喫し、異邦の軍隊に一時期占領されますが、この占領もずいぶんゆるやかなもので、根本的にこの国民的体質がなおったとも思えません。

金方慶　（苦笑して）わが国は、大変な隣人を持ったものだ。えらい所に建国してしまったものだな。

小松　そういうわけですから、「外とのつきあい」において、八方に眼をくばり、たくみにヘッジングする、などという事はまことに下手――というよりは、今の所、考えてもいないと思います。日本は、日本列島というゆたかな母親に抱かれていばっている幼児のようなものですね。「生きのびるためのおとなのつきあい」なんて、必要ではない。だから、日本人全部にとって「外とのつきあい」は、それぞれ「好きな国・きらいな国」をきめる事にすぎない。両面、三面外交も、合従連衡も、観念としては理解できても、何ら現実的意味を持たない。日本の「国民外交」とは、とりもなおさず、観念的正邪の判断に裏づけられ、好悪の感情をもとにした「一辺倒外交」にほかならない……。

金方慶　（嘆息して）おどろくべき幸福な国だ……。それであのように、大元帝国に対して無礼、無謀なふるまいに出るのか……。今まで元が何回日本に対し、招諭、宣諭の使いを送り、元の国書を送ったと思う？――大帝の意嚮で何と八回、高麗からも二回、三回も説得使を出しているのだぞ。それに対する通牒をことごとく拒み、国信使を対馬、太宰府にとどめて京師にもおくらず、あまつさえ、最近の二度は、使者を斬るとは、南海諸島の禽獣にひとしい蛮酋さえいたさぬ倨傲暴慢のふるまいで、とても理性ある開化国とも思えぬ。朝貢せぬならせぬで、自らの力をはかり熟慮した上でりっぱにその理由を申しひらいてみせるのが文明国であろう。

小松　第四次の招諭使の時は、一応京で菅原長成が、国交拒絶の返事を書いたんですが、鎌倉幕府がおさえちゃったんです。とにかくそういう無茶がまた、日本の国内じゃ人気があるんです。――大国に屈せずよくやった、とか……山椒は小粒でひりりと辛い、なんてのは日本人のとても好きな所で……。国が小さい、島国だ、てえコンプレックスが、逆に

「大国ぎらい」「軟弱外交ぎらい」「実力の裏づけのない観念的大義好き」の傾向を醸成するんでしょうね。

金方慶　それもあとさき見ての話だ。――暴虎馮河の蛮勇が、一国をあずかるものの行動の規範になるような事が、そもそもあっていいものか！

小松　それが許されるような、ラッキーな位置に、あの国がいるんです。――それに、長年の南宋づきあいでしょう。金の圧迫をうけ、以夷制夷のトリック外交がついに裏目に出て蒙古に滅された南宋のインテリが、たくさん日本に亡命して来て、公武ともに、あの「尊王賤覇・攘夷」イデオロギーの影響をうけていまさあね。儒学の中でも、宋学はそもそもが契丹、金、蒙古と異賊胡狄の漢文明圧迫の危機意識のもとにできたものだし、一方ではずっとおされつづけだった道・仏二教に対する思想的対決の危機意識をはらんでいる所があって、妙に力んだ所がある。異民族征服王朝下のものですが、考証、自然を重んじた後代の清学の方が、まだのびやかです。それに、宋学をまとめた朱子は、対夷主戦論者だったでしょう。――ですから、大義名分論なんて「天理」にもとづいて尊王攘夷なんて、観念的イデオロギーが、素朴な東国鎌倉政権を、ますます盲にしているかも知れない。京の堂上公卿にいたっては、なにしろ承久の変以後、六波羅探題ににらまれて、まるきり実際政治にさわれないで、考える事がますます観念的で、観念的にラジカルですからね。尊敬する宋人にはばまれて国書無視の挙に出たんでしょう。まあ、宋学の大義名分論、尊王攘夷論は、このあと建武の中興なんて、きわめて時代錯誤的な政治反動をひきおこし、こいつはすぐつぶれても、はるか後代、幕末、近代にいたるまで、日本の在野インテリの中に、急性イデオロギー中毒によるヒステリー性ラジカリズムてえ後遺症をのこします。まあ、イデオロギー中毒の最初の感染が、今おこっている所ですな。禅もそうで、栄西も祖元も、まあやはり南宋の思想的影響下にありますからね。――南方の頓悟禅も、よほど世界を広く見、多様な人物、多様な民族にあっての上ならいいが、底辺が貧しければ、夜郎自大に増長慢を加える事になりかねない。あれは言わば、南画みたいなもんで、仏教思想の草書ですからね。日本みたいな国では、むしろ北方の漸悟禅みたいなものの方がいいような気がするが……。何しろ日本はインドという奇奇怪々なバラモン、ヒンズー的世界から抽象された仏教思想を、中国でまた一度咀嚼飜訳抄訳してもらい、それをもってくるもんだから、浄土でも禅でも、何でもインスタント化してしまう傾向がある。ま、東国の鎌倉武家政権は、まだまだ素朴単純で、「武断」が政治の要諦になっている段階だから、これでいいかも知れませんが、もう少し政治が複雑になってくると、徳川政権みたいに、総合大学的な天台にかえらざるを得ない。――それにしても、相模太郎時宗は、胆甕のごとしといっても、まだ三十一歳、至元十一年の侵寇（文永の役）の時は、まだ二十四歳です。祖元禅師だって、「雪光影裏ニ春風ヲ斬ラン」なんて、あまりかっこいい事を言って、アジらない方がいいと思うんですが――何しろ白髪三千丈式の南人の誇大ユーモアが通じる相手じゃないんですからね。元使が斬られちまったのは、どうもあの影響がないとは言えない……。ま、そんなこんなで、日本て国は、鎖国している分にはいいが「外」へひきずり出そうとすれば厄介な国ですよ。「国際社会」では、「行儀」というものがわからなくて、ひっぱり出すにしても、自分から出てくるにしても、いつまでたっても小児的な所がある。

まあエリートの中には、国際人らしいものもちょいちょいうまれますが、歴史的地理的に形成された国民的性格は、一朝一夕には変りそうにない。大体、「世論」や「ジャーナリズム」てのが、いつまでたっても「鎖国社会的」で、外の世界と日本をつなごうとはしない。また識者ジャーナリズムみずから、これを自省し矯正しようとしない。論が栄えれば栄えるほど、感情的内閉的になり、「外」が見えなくなって、「他人」の言う事をきかなくなり、議論は常に、冷静にことわけたもの、行動から一歩ゆとりをもってひらかれたものがおしつぶされ、ヒステリー的ラジカリズムが痙攣的行動をうみ出す事になる。——それで何とかなってンだから、運のいい国で……。

金方慶　だが、もはやそうも行くまい。——今度こそ、日本は手痛い教訓を得、場合によっては、国がほろびるであろう。

小松　さあ……そうなりますかねえ。日本はまだまだついていますからねえ。

金方慶　（瞑目して）高麗は、開国以来、貴邦との交は密ではなかったとはいえ、もともと貴邦にさしたる怨憎を抱いていたわけでもない。——南東の海辺民は貴邦の北西領や島嶼民と私に往来し、また時に双方交々私掠もあったときく。——しかし、今、貴邦は、南宋滅亡のあと大元帝国の全力あげて討つべき敵となり、元朝の駙馬（娘婿）国王を頂く高麗にとっても、討ちてしやまぬ賊敵となった。——貴邦朝執の頑迷暴慢、外交の無知非道が、貴邦にもっとも密な近隣であるわが高麗をして、貴邦を真から、心から憎悪せしめる事になったのだ……。

小松　しかし、金将軍……。日本はくりかえし申しましたように、海島辺隔の閉国であって……。

金方慶　（首をふって）元こそ暴慢、元をこそ憎むに値するではないか、といいたいであろう。が、国がそれを言うべき時期は、とうにすぎたわ。今となっては何も彼もおそすぎる。——よいか、元朝太祖チンギス・ハーン、即位六年にして華北より靺鞨の地を占める金王朝の攻略をはじめた。と同時に金支配下の契丹人（もとの遼の国民）金に叛き、暴軍と化して鴨緑江をこえ、本邦高麗北部を侵す。時に、わが国高宗の三年（一二一六）の事である。二年後蒙古軍南下して、本邦東北に入り、これより高麗は蒙古と、好むと好まざるとにかかわらず接触のやむなきにいたった。年々諸邦を降し、征する所遠く西域大食に及ぶその兇悍強大の兵力をたのみ、蒙古の高麗に接するや強圧そのものであって、ある時は莫大な貢物を一方的に課し、果し得ざれば兵を入れ、和を請うれば必ず易難両面をふくむ条件を出して、易を果しても難をおくらせれば、それを口実にまた兵を入れ、しめつ、ゆるめつ、次第に高麗への支配をつよめて、ついに首を扼するにいたった。高麗また文武対立して朝議必ずしも常に一致せず、最初、康寅の変（一一七〇年、高麗におこった武官クーデター）以後権をにぎる崔氏は、果敢な抗議に出て、高宗一八年（一二三一）サルタイの侵入以来、実に六度にわたる蒙古軍の侵略をうけ、和を請えば貢に無理難題、ついに第二次侵略をうけるに際しては、王都を開京より江華島に遷し、諸道に檄して民を山城海島によらしめ、「清野の計」に出た。これ以後、蒙古兵はわが国土を蹂躙する事くまなく、はげしい軍民の抵抗をうけつつも、わが国土田野は、焼かれ、破壊されつくす事、実に三十年、六度侵略をうけ、六度和を請うたが、そのうち最後のジャラルタイの攻略は、前後六年、四回にも及ぶもので、第一回の時だけで蒙古兵に虜えられし男女二十万六千八百余人、殺戮されし者かぞうるにたえず、到る所

の州郡みな煨燼となり、以来骸骨野をおおう、と国史にしるされたは、誇張ではない事、何よりも参戦した予がこの眼でたしかめている。

国人の殺傷、国土の荒廃、もはやこれに耐えずとして、爾後朝議抗戦より恭順に転じ、抗戦派崔氏をたおして、江都より陸都に遷都、太子を燕都に入朝せしめ、人質をさし出し、駅逓をうけ入れ、ようやくにして蒙古軍と、その監察ダルカチのひきあげを見る。——しかし、三十年におよばんとする兵火のため、国土人民の疲弊荒廃は言語に絶した。しかもなお高麗王は元帝に太子を人質にさし出し、貢物の難は年々重くのしかかる。——かかる所に、先王元宗七年（一二六六）突如兵部侍郎黒的、礼部侍郎殷弘、皇帝の親書をたずさえ来り、日本への国書をもって招諭使を送る導をせよ、と命あった。時の高麗朝堂いずれも色をうしない、ひたすら日本が、夏地（中国中原）の実情をよく知り、皇帝招諭を礼をもってうけ、温順に交をひらくのを祈ったのは無理もないと思わぬか？　もし非礼倨傲の態度に出て、帝の怒りを買い、出師とならば当然高麗はその出軍基地となり、暴戻の蒙古軍は出陣の途上再び高麗に進駐し、わが国は三十年兵火にいためつけられた疲弊をもって、壮丁、兵糧、軍船、水夫を調達せねばならぬ……。

小松　フビライに、日本という国の事を教えて、食指を動かしめたのは、元朝に侍した高麗人趙なにがしでしょう？——まったくよけいな事をしたものだ。

金方慶　（悲しげに）いかにも……趙彝は高麗南部咸安出身のもので、土地柄日本の事も知っており、蒙古軍侵略の時、蒙古軍について燕都に行き、皇帝の知遇を得るようになった。進士に合格し、よく諸国語を解する秀才が、なぜ、故国の窮乏にさらに鞭をくわえるような事をしたのか……。外国人として帝の関心を買うためなのか……。悲しむべき事だが、高麗興国して三百年を経、仏道を国教として、これに儒礼を加うるに、高麗の地方人士、必ずしも故国人民への誠忠仁慈をもってすべてのもの事の判断の基盤とするにいたらない。武人、多くは勇猛なれど経綸の大局を見る眼なく、文人王侯、尚礼を知るといえども、事大事強の傾向あって、かえって国に仇する事すくなからず——たとえば林衍は保身に汲々として世宗を一時廃して蒙古干渉の口実を招き、崔担は林衍を討つと称して西北の地を蒙軍に献じて自ら虎威を借る狐となり、北辺に寝がえった貴族洪氏の子茶丘は、かえって高麗にもっともはなはだしく仇する存在となった。三方抄の徒もやはり自惚れて国を損ったと見ずばならない。

小松　そういえば金将軍は、洪茶丘の謀計讒言にあって寃を蒙り、御老体に手ひどい拷問をうけられたそうですな。もう御体は何ともありませんか？

金方慶　（さびしく笑って）老骨もはや鉄湯に灼かれようとも大事ないわ。この身は高麗の、国と王と人民にささげてある。——日本は海外にはうといとは言え、国内では、君子、尚武両立するときいた事がある。とすれば誠忠の気風が浸透して、こんな事はあるまいな。

小松　なあに、日本は幸いにして、外国の長期にわたる侵入分断をうけた事がないから、そういう事が起らなかっただけで、武人の倨傲粗暴、公卿文人の軟弱事大、本質はあまりかわりありません。たのむ庶民も、捕虜になるとえらく熱心に敵軍に協力するそうで……。忠義不忠の観念は朱子学とともに浸透して行きますが、所詮学者の弄する観念論、右から左まで、小児的ラディカリストをうんで、真に広く考え深く国を思う大人にテロをふるっ

たり、墓をあばいて辱めをあたえたりするのがおちで……。お気の毒に将軍、あなたも死にのぞんでは……。

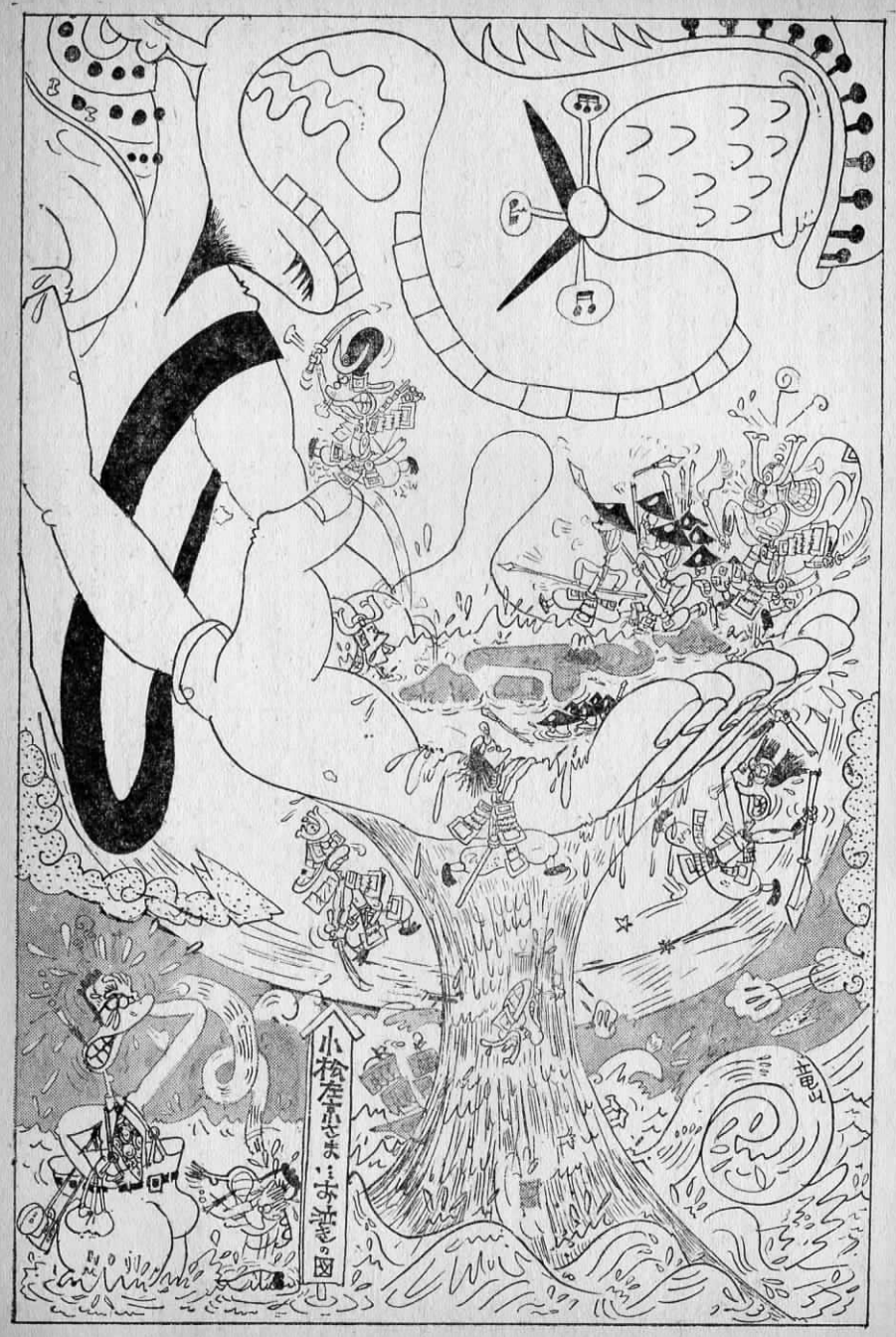
金方慶　なに？

小松　（口をおさえて）おっと……。これは言っちゃいけないんだっけ……。

金方慶　（腕を組んで）よいか……。その高麗の切なるねがいを、日本は実に六度までふみにじった。第一次遠征がおこなわれるまで、六度も風濤をこえて使者を出し、その度に無礼にも通牒一つよこさず、使節はあるいは対馬にとめおかれ、あるいは博多に年余も放置され、そのとりあつかいは無礼粗略である上、幕府にも京師にも赴かせぬ。高麗ひそかに蒙古に問責さるる危険をおかして直接使者をおくり、事情を審かに説明し、危険を説こうとこころみたが、牒のみおくって、決して直接使者に面接しようとしない。わが方の使者は、単に大陸の情勢を説いて蒙をひらき貴邦のおかれた危険な立場を説明するだけではなく、場合によってはわが国のおかれた窮状を説明し、伏して苦況をのがれしめん事を請うはずであった。使節をかえすだけでよい。大元は強大といえども貴国とは風濤へだつる事万里、地を接して絶えず直接強圧に対する高麗とちがって、元帝たりとも容易に兵を入れられるわけではなく、中国皇帝を見ならう元帝は、修好朝貢の礼さえとれば、勢威東海に及んだ事に満足して、それ以上の事はなかったはずだ。――たしかに対宋攻略の一環として、宋の東海後方を断ち、あるいは海路攻略の基地とする構想はあったかも知れぬが、知っての通り宋は襄陽陥落ののち、意外にあっけなくほろんだ。たとえ、その後大元との間に齟齬が生じてもその時はその時の事、高麗にもまた仲介のとり方もあろうし、貴邦また、海壁をたのみに、いつでも思う通りの策をとれたにちがいないし、宋人のひきわたしを拒むも自由。今、諸国間の常識にのっとって、ごく儀礼的に返礼通牒の使を出しても、貴邦にとってはなんの損害もないばかりでなく、もしそれをしてもらえば、高麗にとっていかにありがたかったか、小康わずか両三年あるいは五年あらば、高麗の疲弊はそれだけ癒える。が、もし逆に元帝出師を令すれば……軍途、兵站、出撃を荷わされる高麗の疲弊はさらにこれを加え、飢俘山野にみち、民は亡ずるであろう。近隣往年の交やや疎なりといえども使節辺民の往来なきにしもあらず、既往を望ずれば、朝はかわるといえど、かつて唇歯の関係にあった両邦ではないか。伏して請う。よろしく隣邦の外患窮状を明察して、これを救いたまえ、と……。李侯は書面にこそしたためなかったが、口上として、そこまで言えと言いふくめてあった。が……貴邦は書に通牒もいたさねば、使者に朝廷執権への謁見も許さず、冷たく無礼に拒絶したままだった。いったい、これが聞く所の東方聖明の君子国か？　これでも〝国〟か？――異人戸前に来って声を発す。言う所審ならずといえども、禽獣蛇鬼にあらざれば、とにかく面接してその発する所の意をきかんとするのが人倫であろう。それを何ぞや。隣邦の国使の面前に戸をたてて応えず。諸蛮といえどもいやしくも王をたて一国をかまえるもののするべき所ではない。――あまりにも勝手なやり方ではないか。

小松　……。

金方慶　はたして、蒙古は屯田を発して軍を高麗に入れ、農牛農器、軍馬秣糧の負担は疲弊せる高麗の農民にかかって来た。次いで大小軍船九百隻の建造令が発せられ、三万五千の工匠人夫、道具、食料、船材すべて高麗の負担となった。煩劇急迫の工事おわるや、高麗は兵士六千、梢工水手六千七百を徴する



事を命じられ、さらに蛮子軍のために婦女を、一万五千の元軍、五千の屯田のための糧秣を負担しなければならなかった。――この時、高麗の朝野には、元の誅求に対する、面に出せない怨嗟と平行して、頑迷倨傲の日本という国に対する、深い深い憎悪が燃え上った。おわかりか？　日本の方……。逆怨といわばいうがよい。が、海一つへだてた隣邦が、これほど永年蒙古との闘争応対に苦しみ、国土を焦土荒蕪にかえて万民塗炭の苦しみにあえいでいるのに、その窮状を少しは救ってやろうとも思わねば、同情のかけらもよせようとしない。いや、第一、窮状を訴えようとしても、きこうとさえしないのだ。これも間接の理屈かも知れぬが、高麗がかつて全土を清野焦土とかえて蒙古と闘ったが故に、それだけ日本への侵寇がのびたのではないか。高麗は、かつて一度たりとも、日本に援軍を乞うた事もなければ、みずから進んで蒙古に征日をそそのかした事はない。――当然の事ながら、征は高麗の地をさらに荒廃疲弊させるからだ。たとえ裏家の犬でも、飢うるを見ればこれに食を養うがすなわち人の恩愛であり情である。窮状知らずといえどもその声で察する事のできぬは人というに値しない。にもかかわらず、貴邦、いたずらに海島によって海外に目をふさぎ、亡国宋人の妄言のみきいてその倨傲をならい、隣地の窮を察せず、礼を以てするに耳を藉そうともしない。救けよとは言わず、まずききたまえというに鼻先で戸をたてるの挙をくりかえすのみ。かかるものはもはや隣邦ともよべない。友邦でもない。あまつさえ、屢々私寇して、海辺窮民より財物を掠める事やまず、昔より度々とりしまりを請うも誠意がかつて見られる事はなかった。人語をきかず、ただ徒に一方的におのが欲のため掠める事のみ汲々とするは、もはや人胤にあらず、形は人に似て中実は豺狼にほかならず。高麗を窮せしめる第一の敵、第一の賊なり。その倨傲の因ただ蒙昧にあるのみとすれば、蒙昧すなわち大乱を導く大罪なり、本邦にとっては大逆になり、蒙をひらくには、ただひたすら討つにしかず……こうまで思いつめるにいたったのだ。はっきり言って私でさえ……。高麗の人士の中には、貴邦に対するこういった屈折したはげしい憎しみがくすぶっていた。

小松　わかります。将軍……。無知でひとりよがりで思いやりがなく粗暴なため、近隣に友人を失って敵をつくる……。事態は今でもあまりかわっちゃいないみたいです……。

金方慶　第一次遠征では、貴邦は暴風にすくわれた。――が、あれとて海をあれほどおそれる蒙古の将兵の臆病なくば、嵐の前日に兵をことごとく船上にひきあげ、壊滅させられる愚をおかす事なく、兵力は温存され、太宰府はおとしいれ、北九州を掌中にしていたはずだ。――いずれにせよ、日本の無知無礼が東征の可能性を増大し、高麗は元の一層の圧力増大を察しおそれて、ますます深く元に身をよせるほかしかたなくさせた。太子は元皇帝の娘を公主として高麗王室にむかえ、その横暴にたえ、高麗王がみずから蒙古の服、蒙古の俗にならい、群臣すべてこれにならわしめられた。もはや元朝の外戚となるしか、高麗の生きるみちはない。――見よ、私のこの開剃弁髪を。胡服を……。これが三百年、その独自の朝をまもり通した高麗宰相の姿なのだ……。

小松　（小さくなって）何とも申し上げようがありません。――日本じゃ、ちょんまげ切るのも、まあ洒落みたいにやっちまっただけで、風俗が実際に国の存亡とかかわるなんて事、考えた事もないでしょうな。

金方慶　そして……七年たって、今度の再征だ。高麗は再度、死にものぐるいで兵船九百隻、梢工・水手一万五千人、正軍一万、兵糧十一万石をかきあつめた。――高麗の地を訪れてみよ、日本の人……高麗の山野にもはや船材となる一木もなく、田畑はかりつくされ、村邑に一人の壮丁もない。いや、老人少年さえいない……（わびしげに）それを、私がやったのだ……この、国土国人を愛する事人一倍強く、高麗への思い誰にも負けず、一生を戦旅にあって、愛する国土国人、敬慕する王室のために転戦しつづけたこの金方慶が、自分の手でやらなければならなかったのだ（落涙する）。

小松　（もらい泣きしながら）辛かったでしょうな。お察しします。

金方慶　それもこれも……高麗を存続させるためにやった事だ。故宰相李蔵用卿は、回回教徒よりきいた言葉だと言って、よく私に言った。「猛虎たりとも暴君にまさり、暴君たりともうちつづく内乱にまされり」と……。が、それに私はつけくわえている。「内乱うちつづくと言えども、国を喪するにはまされり」と……。そして、日本の方……今、亡国の運命は、貴邦の上に刻々とせまっている。貴邦政府がこれにどのように対し、元帝がいかに処するか知らぬが、場合によっては日本という「国」はあの山島上より消失し、屍は山野を埋め、のこれる民は四方に散じ、辺境、孤島にうつされるであろう。われらのひきいる東路軍四万、かつての宋将范文虎のひきいる江南軍十万、艨艟あわせて三千三百隻、すでに九州海岸に防壁をきずいたというが、こちらには回回砲（大砲）石火矢（ロケット）はじめ、貴邦の武人のかつて見た事のない強力な新兵器がある。とてもふせぎきれまい。上陸月余にして九州を制し年内帝都をおとし国土の大半は焦土と化すであろう。江南軍の南人は、農器具、種籾、家畜を携帯している。九州制圧後、南人はまず屯田として入植し、兵船は江南の民を続々とはこびこむはずだ。

小松　そう……うまく行きますかねえ……。

金方慶　（立ち上りながら）陸に上って橋頭堡をきずいたら……蒙古騎兵はどんなにかおそろしい破壊劫掠をやるか……私は何度も闘って知っている。日本に清野の計を知るものがいるかな……いたとて持つまい。正使を斬られた事をはっきり知ったら、元帝は徹底的にやるぞ。名誉にかけても……。すでに第三次遠征隊を後続させる案を練りつつあるともきいた。……日本人はどこへ逃げる？　山中にかくれて、原初の梟狼の徒にかえるか？　北方へのがれて、倭胡として生きのびるか……。いずれにしても今となってはおそすぎるのだ。高麗もまた、その勢を回復する途を、この遠征にかけている。――今さら帝に謁しても何になろう。征は発せられた。今から貴邦のために何をやってもおそすぎるのだ。――元兵につかまるとうるさい。いずくなと去るがよい。――かくれるなら、キリスト教会がいいと思うぞ（去る）。

小松　まったく考えてみりゃ、一度ぐらい本格的外寇をこうむった方が、のちのちの日本のためにはいいぐらいだったかも知れないが――それにしても、またまた台風にすくわれるとはなあ……。日本という国の運命は、風だの地震だの海流変化だの、妙に自然とかかわっているような所がある。といって自然に強い関心をはらい、自然を大事にするかといえば、そうでもない。どこまでいっても子供っぽい〝過保護国家〟〝ナチュラル・ウェルフェア・ステイト〟だな。今度は一つ、台風SFでも書いてみるか……。

（第五話・おわり）